言葉と地名

――鶴見・石垣原をめぐって――

富来　隆

一、はじめに

人間の活動が、社会的に認められるのは、それが他の人々と関係し、影響を与えることによる。その人の言葉（コトバ）・その人の行為（コト）・作った物（モノ）などによる。それを文化と呼ぶ。

私たちの生活が、まず人間関係において、親子・兄弟の関係から親族にとひろがり、また隣近所からしだいに広い集団（社会関係）に入る。そこでは、言葉と行為（コト・仕事）が中心になる。同時に、地域においては、「むら」（群・村）を作り、すすんでは「まち」（町・街）を作るようになる。人間関係も、仕事も、複雑になり、言葉もまた複雑・多岐になってくる。

と同時に、私たちの生活は「土地」をはなれては生活できないから、従って、当然に、土地の呼び名が必要になってくる。まずは自然とのかかわりにおいて地形が、動・植物や鉱産物が、さらに人間の作った文化的な造形物が、「地名」として付けられる。

もう一つ、忘れてならないことがある。人間関係（人（ひと）を示す言葉）においても、仕事（職業や地位）においても、また地名においても、直接的な名称だけではなく、比喩的な表現が多くなってくる。人間の活動が、身体ことに手足の活動で認知されることの多いことから、社会的存在を示す語に、身体の部位をもってする表現のいかに多いことであろうか。

言葉と物、言葉と身体。そこには、部分（持ち物）が全体を代表するとか、マネをすれば本当が実現するとかいうような思考が作用してもくる。

すでに、戦後早く、H・ハヤカワの『思考と行動にお

ける言語』が、私たちに大きな衝撃を与えた。むさぼるように読みふけったことを思い出す。

近年においては、M・フーコーの『言葉と物―人文科学の考古学―』などが、まさに革命的思想書として旋風をまきおこし、言葉の社会学の書物があふれている。

しかし、ここに取上げる問題は、そのような大それたものではない。人間の活動を、コトとモノとの関係において、またコトバにおける身体表現として（前稿につづいて）別府地方の歴史的文化を、「地名」を通して、具体的な考察を試みようとするものである。

たまたま大分大・教育の『日田・玖珠』（文部省特定研究）に参加していて、山間部の日田と、海岸部の別府とを比べながら考えていく機会にめぐまれた。そういうことで、まずは「地名」をみることから論をすすめていきたい。その土地の性格を知ろうとするときに、地名を総合的に考えることで、その地方の特色の一端をうかがい知ることが出来ると思う。

本論に入りたい。

二、生活と地名

地名は、生活の一つの表徴である。文化的な産物である。その意味からも、地名をみていくときに、先ず明らかにしておかねばならないのは、どういう基準（立場）で、どう分類するかということである。地名はまた、歴史的に変る（生まれ、死ぬ）から、何時のどういう資料を利用するかも明らかにする必要がある。右の二つが変ることで、その内容も変ってくるからである。

何よりもまず、現在または歴史的に用いられている地名の文字が、どういう意味であるのか、その地名の正しい意味をそのまま表しているのかどうか、ということの確認が必要である。伝承や聞きとりもふくめて、正しい地名の性格を正しく理解しなければならない。もしそれが間違えば、地名の取り扱いや分類そのものにも意味がなくなるおそれが多い。用心しなければと思う。

本稿の資料としては、最近の『別府市誌』巻末の付表（大字別字名）と、付図とを利用したい。

さて、地図で別府周辺をみると、北には拳のような国東半島が、南には東西にのびた大分・佐賀ノ関があり、

別府湾のつき当りに別府市の海岸が南北にのびている。C字状というよりも、カタカナのコの字を逆にしたような形といったほうがよい別府湾である。

まっすぐ南北にのびる海岸線にそって平野（いま市街地）があり、それをとり巻くように、西に山々がある。

まず、鶴見岳（一三七五米）、その北に内山（一二七五米）、さらに伽藍岳（一〇七五米）の高峰が連なる。鶴見岳の西には、由布岳の峻嶺（一五八四米）が聳え、北は日出町境に、南は大分市境にと、多くの山々がC字状に似て別府の市街をとり囲んでいる。

河川は、山から海へ、ほぼ西から東へと並行して、ほとんど支流なしに、まっ直ぐに流れている。

そういうことで、地図ではわりあいに簡明にみえる。

海岸線は南北にまっ直ぐで、南から浜脇向浜・北浜・的ガ浜・餅ガ浜・上人ガ浜・亀川浜田と、「浜」のつく地名が並ぶのは、これは一偉観である。わずかに、南に浜脇浦が、北に関ノ江、さらに小浦がある。

さて、「浜」とは「砂浜」のことである。漁師たちが小舟を砂浜に引き上げて、つないでおくところ。だから「浜」地名は漁師村の代名詞のようなものである。

これに対し「浦」とか「入江」とかは、「入りこんだ海」で、大きな船が入れる港である。潮流のつき工合もよい所である。浜脇浦が大友氏とかかわりを持ち、海上交通の要港であったこと、朝見を安曇（あづみ）の転訛とする説をすてがたい理由でもある。

別府地方が、早くから漁師たち（海人族）の村としても発達したことを考えれば、彼等にとって鶴見岳が特に霊峰として敬仰されたに相違ない。そこでは、北九州の宗像大神・住吉大神、また豊前の八幡大神などと同じく強烈な「天道信仰」が存していただろうことは、推察にかたくない。鶴見岳北の内山から、東北に三〇度の「トビ」（竜蛇神の意）に社祠（いま、えびす様）をまつって、別府各地の漁師たちの信仰が厚いとのことも、これと関係が深いようである。

「天道信仰」のことについては、さきにも述べたのでくり返さないが、一言すると、鶴見大権現社（火男火売社）は、鶴見山頂の神池から東北三〇度（夏至の日出線）にあり、その先をのばすと亀川の市杵島姫社（宗像

大神）にとどく。それより海をこえて日出町の真那井八幡から杵築の守江湾北の住吉社に、さらに安岐の奈多八幡、海上の市杵島の社につづく。いずれも古社であり、大社である。これが偶然のことだとは思われない。

山頂から正しく東への線（春分・秋分）は、南立石にとどく。「立石」とは、まさしく太陽崇拝そのもの、の世界的な証しである（エリアーデ著作集）。

そして、鶴見大権現から、東しては石垣八幡社があり（古墳群あり）、西には塚原をすぎて立石山にと及ぶ。西北三〇度には郡境の天間八幡がある。ここは宇佐川（駅館川）の源流地であり、御許山から真南の位置でもある。

また「内山」の東北三〇度に「トビ」（竜蛇神のこと）の地と社祠とがあり、その先は竈門八幡にとどく。

これだけでも、すばらしい天道信仰の存在感が、強く私たちにせまってくる。

このような自然と人間とのかかわり合いにおいて生まれた文化であり、また地名・社祠である。はるかに先人の知恵が偲ばれる。

鶴見大権現の社横を流れる春木川沿いに、鶴見村と石垣原の村とが発達した—春木川の源流にトビがある—。これらの村々は、実相寺山の湧水線と関連して（『別府市誌』）、早くから開けた農村地域である。

古くから、人間は湧泉のあるところ（それより上の丘の端）に村をつくった。鳥獣でさえ泉の水をのみにきたことは、山下ノ池の泉ちかくで、縄文・弥生の石鏃から近代のバラ弾まで拾集されていることでも証明できる。「泉の大きさが、集落の大きさを決定する」ことは、学生諸君をつれての各地の調査で実感してきた。これは、別府だけにかぎらぬ、歴史の真実である。石垣原には、著名な古墳群も存しており、おそらく郡府の所在地でもあったことと思われる（『豊陽古事談』参考）。

ここに石垣原の「原」（はる）とは、いまの野っぱらのことではない。単なる草っぱらではない。

古く「原」（はる）とは、朝鮮半島の古代での「村」（パル）の音写である。中田薫博士によれば、「馬韓の卑離、新羅の伐（Pöl）・弗（Pul）・火（Pul）、百済の夫里は、共に同一の韓語を写した借字なり、」とされ

て（『法制史論集』第三巻）、古来「村邑」の義である。

石垣原の村が、実相寺山の湧水線上に展開され、著名な古墳群も在すること、そういう点でも、古代の「村」たるにふさわしい。「原」地名の各地で、最近も団地や新道路の造成などで、遺跡の発見が相つぐのも、「原」（はる）の本義が右の如しと知ってみれば、これは理の当然であって、おどろくには当らないことになる。日田の神社回りの時、小迫辻原の遺跡も案内して頂いた。また大分の庄ノ原でも道路の造成で、大々的な発見が報ぜられた。ただ今、福岡県嘉穂町の鎌田原で（九・二一新聞）、弥生中期の王族級の墳墓群の発見が報ぜられている。今後、ますます増えることだろう。

つぎに、『別府市誌』から「大字名」をいくつか例示して考えてみたい。南の方から、見て行く。

まず、朝見と浜脇の地名がある。

朝見（あるいは浅見）が、古く『続日本紀』には敵見（あだみ）と記されていること――それからすれば、じつは東の熱海（あたみ）と同音・同義の借字だと考えられる。また、浜脇の地は、『豊後國志』に「沙中、湧泉有り」と記されるほか、諸書にみえる。これは、浜脇の本義は「浜湧き」だということになる。セト内海の中央東部の塩飽（しわく）諸島の名が、じつは豊後水道からと紀伊水道からとの両方の潮（七〇：三〇の比率）の合流点であり、塩飽（しわく）とは、潮湧く（しおわく）の義の借字だとされるのと、同様に考えられよう。

朝見＝熱海と、浜脇＝浜湧きと。名称は違っても、両者は同じことを指していることになろう。

これに対し、朝見（ふるく敵見）も、熱海も、ともに安曇（あづみ）からの転訛だ、とする松前健氏の説もある（『日本神話の新研究』）。近くに横穴古墳群もあり、浜脇浦は海上交通の要港なること言うまでもない。明治の初めに、今のような別大道路が作られる以前、高崎山のうら越えでは、朝見がその要地であった。氏の所論、説得力があって、また捨てがたい。

つぎに、北部の地名を見よう。

関ノ入江（いま関ノ江）とは、関と入江との合作した地名である。入江という地形＝これは海からの良港である＝と、関所という政治的工作物と、二つが結びついた

地名のことは明らかである。

それに対して竈門（かまど）とは、その地形が人工物のカマドに似ていることから比喩的に付けられた地名である。『豊後風土記』に、「郡西北、竈門山」とあり、『弘安図田帳』には「竈門庄」と見えることから、これは古くからの名称であることが知られる。

その南に、鉄輪（かんなわ）の地名がある。農家などには、つい近年まで、カマドとイロリがあった。カマドが土間で米をたく釜をおくのに対し、イロリは板の間を仕切って、上から自在鈎（東日本では鉄輪）を下げて、それに鍋などを吊して煮沸していた。宮本常一氏は、一年のうち三分の二以上を調査に歩かれており、これらを「東日本と西日本」との文化的相違にまで広げていった（氏の『著作集』）。いずれにしても、これらは人工の道具を「地名」に見宛てたものであるが、ここではさらに人間の移動さえ想像される。

他方、古く『風土記』において「河直」（かなお）に作る。この文字をそのまま受取れば「川がまっ直ぐだ」という地形名詞になる。現在でも、この付近たしかに「まっ直ぐの河流」であって、そのまま本義と考えてもよいように思えるが、はたしてどうであろうか。

カナオと、カンナワと。地形と、人工物と。文字こそ違うが、両者の発音はよく似ている。朝見の地名（借字）の例もあり、その本意は何なのか。人さわがせな地名ではある。これを「語呂合わせだ」として片付けることは易いが、それでは研究の余地はなくなる。何故なのかの追求こそが必要であろう。

さらに、近くに鶴見加納（かのう）の地名がある（『図田帳』）。また内竈には「釿の掛」（かんな）の地名も見えて、いよいよ複雑さを加える。

本稿を書くについて『別府市誌』の付表・付図を見ていくうちに、付近に「タタラ」の地名があり、そのほかに鍛冶関係の地名が出揃っていること（右のカンナもその一つ）、また藤内氏からの御教示で社祠のあることも分かった（後述）。このことから、私としては、右の地名を「竈門」と「鉄輪」という台所の名称と決めてよいかどうかに、迷い始めたところである。

またこの原稿を作っているとき、たまたま『大分県地

方史』一四二号がとどいた。巻頭に渡辺澄夫教授の論文が寄せられていた。そのなかに、『宇佐大鏡』に見える「舟生」（ふのう）の地名についての私の所論（同誌の八四号所収「豊後国府の位置について」）を「間違いだ」（「舟生」は「丹生」だ）とされているのが目についた。ここで詳しく論ずる余裕はないが、同じ地名のことであり、かつ教授の記述にどうも合点のいかないことがあるので、不勉を恥じながら、ここで本誌をかりて、御教示を願って、左に記す。

『宇佐大鏡』は、『大分県史料』二四（宇佐八幡宮文書の一、昭和三九年刊）にのせられている。『県史料』の編集には私も参加し、注付けも分担していたから、舟生を（丹生ヵ）としたことには責任を感じていた。渡辺教授の定年を記念して右の論文を捧げたとき、注意を重ねて、「舟生」のことを記したつもりである。いまも、その方法は正しかったと思っている。吉田東伍博士の説にしたがう結果となったが、決して「丹生」とあるのを「舟生」に直したのではない。宇佐大鏡に「舟生」とあるのを、「舟生」と読んでの解釈である。

問題は、『宇佐大鏡』の、左の文言である。

(1)「勾別府　田数廿六町（下略）」

(2)「舟生津留畠地　廿町（下略）」

(3)「勝津留畠　畠七十町（下略）」

田　三町

大鏡には、この順に並んで記されている。いま便宜的に(1)(2)(3)と記しておく。この順に並び、その間にほかの地名は記されていない。

渡辺教授は、大野川岸の（新発見の）「丹生・鶴田」が、古代の「丹生駅」の位置に当るとされる。丹生地名の発見は大きな成果だと思うが、そのことが何故に大鏡の「舟生」と結びつけ、舟生を否定して「丹生」にしなければならないのか、その説明がのみこめない。

教授は三つ記されている。第一に、「舟生津留は、宇佐大鏡の、不用意な写し間違いである」「丹生津留が正しい」と。ただし、その原史料の考証もなく、十分な説明もなされない。不勉なことで、まちがいとされる証拠の史料・文書を知らない。さらに、私が「舟生と読む」のは、「単に音の近似による着想で」…「論外とすべき

だ」と記される。私は、宇佐大鏡に「丹生」とあるのをわざわざ「舟生」とよみかえたのではない。「舟生」とあるのを「舟生」と読んでの立論をしたことであって、論外だとされるのは、心外である。大鏡には、さきに記したように(1)(2)(3)の地名がその順にあり、舟生が畠地でかつ二十町とある数字も考慮して論じたつもりである―(ちなみに、教授は、大野川岸の地は、丹生・鶴田で、広さは二町だと記されている)―。くり返して、言う。「豊饒」と合わせるために「舟生」に直して読んだのではなく、すなおに「舟生」とよんだのである

丁度、「朝見」と「浜脇」、「河直」と「鉄輪」と、その近似と真意を考えている時だけに、教授の記述を読んで、オヤと思った。私の論文の真意はとどいていないのであろうか。反対に読解されている感じがする。

なお、舟生と丹生とについて、さきの(1)(2)(3)の順列と組合わせのことの問題がある。「舟生」ならば、豊後の国府(いまの古国府)を、南・西・東の順にとり巻いた地名であり、三つのいずれも大分川岸に位置する。

しかし、(2)を「丹生」の誤写だとすると、(1)は大分川岸、(2)は大野川岸に飛び、(3)でまた大分川岸に、(1)の対岸にまい戻る、ということになる。この順列と組合わせは、不自然すぎはしないだろうか。(2)と(3)が逆に入れ替われば別である―。

かって明治の文豪が、小説論として、順列と組合わせだ、という意味のことを記されていたが、学生時代の私には脳天をたたかれた思いがあった。人物と事件と場所との、順列と組合わせを変えれば、全くちがったものになる。以来、このことが、私の頭をはなれない。

渡辺教授は、丹生駅のことを考えていられる。そして、大野川岸の「丹生・鶴田」(方二町)がそれだ、とされているのは、大きな成果だと尊重したい。

つぎに、『宇佐大鏡』に「舟生」とあるのは、これは大鏡が写し誤ったものだと決められて、舟生は丹生が正しいとされる。理由の説明は、されないままである。

それによって、急いで、この両者を結婚させる。

なぜこの結婚を急ぐのか。他に理由が分らないので、ついて行けない。ご教導いただければ、幸いである。

カナオとカンナワと(河直と鉄輪)から、つい「舟

生」のことにそれたが、地名をどう考えるかということでは、焦点が同じだからであった。元にもどろう。

別府の地名について、わずかに数例をあげたにすぎないが、問題は意外に深刻なことになった。それをさらに明らかにするうえにも、一つの方法論として、『市誌』付表により各地の小字地名をみていくことにする。

そのさい、第一には、同じ性質の言葉が、数多く出てくるものは、それだけ生活のうえで必要度（関係）が高い、という点に注目したい。第二には、文化的性格のもので、私なりに心ひかれるもの（例えばタタラなど）を、他の地名や人工物ともセットとして考えてみることも必要になろう。なるべく多くのものを組み合わせることで、見当外れにならないですむだろう。

鶴見と石垣原とに「大宮司」の地名があり、さらに鶴見に「古殿」の名が、石垣には「神宮司」の名が見られること、そしてまた「タタラ」などの技術・文化地名が存することが、じつは、私の立論の動機でもあった。

三、動物とのかかわり

地名を見れば、何処でも、往時の主産業が農業だった当然の結果として、「田」・「畑」のつく地名が多いことに気が付く。別府のばあい、それとともに石垣原の名称から、つい「原」のつく地名が目についた。

さらに気がついたのは、田口・井尻などの身体の部位をもって表現される地名であるが、おどろいたのは、牛馬などのほかに野生の動物名が、そのものずばりで地名としてあるものが多いことであった。

これが別府の特色ではないかと思うほどである。やはり、温泉都市とか観光別府とかのイメージが、頭のすみにあることが、おどろきを深めたのであろうか。

いちおう、順次ながめていきたい。

まず、鶴見岳の地名について、私はすなおに、鶴見と考えたい。この山の北西にあたって、安心院の妻垣社・竜王山の近くに「鳥越」の地名がある。またこの山の南東には、高崎山のうらに「鳥越峠」の地名がある。両者をつなぐと、「塚原」を経て鳥の飛ぶ方向がよく分る。また、県内の「白鳥社」の所在もこれを裏付ける（高原三

郎『大分の神々』）。このことから、鶴見岳をすなおに、鶴（白鳥）の見える山として考えておく。

鶴見岳を女性神とし、由布岳と祖母岳の二男神が競愛した話や、鶴見岳自体を男女つるみの姿とみるのも、面白い話だと思うが、それはそれで、そういう話として、そっとしておきたい。

一方、鶴見の山名に対して、亀川村の名が見える。

鶴と亀と。その取り合わせが面白く、印象的である。内竈地区に、亀山の地名があり、これと亀川との関係が注目される。また亀川地区に、亀ノ甲・亀ノ平の地名がある。南部の浜脇地区にも、同じく亀ノ甲の地名があり、付近に多くの横穴古墳群もある。おそらく亀山とか亀ノ甲の地名は、他所での呼称と同様に、古墳、それも前方後円墳をさすものではなかろうか。

宇佐八幡宮の所在を「亀山」とも言い、大きな古墳だとされる。また大分・丹生川口に「亀塚」あり、県内屈指の大古墳である。大分・志手に（拙宅のすぐ西北に）、「亀甲山」とよばれる古墳があり、大分での古鏡を出土し、東京国立博物館に収蔵されていると和歌森太郎氏が述べている。賀来に歴史資料館が造設された当時、たまたま東京国立博物館長が、私の五高時代の級友だった縁もあって資料館に借出した（いま複製が常陳されている）というような思い出もある。いずれも前方後円墳である。亀川と浜脇との亀山・亀ノ甲などの地名も、その付近の様子からして。おそらく前方後円墳に間違いあるまい。

「亀」の名称は、より一般的には、「塚」であり、別府にも、あちこちに存する。ついでに記してみる。

鬼ノ岩屋古墳（一号・二号）や太郎塚・次郎塚・鷹の塚（百合若大臣の物語にかかる）など、石垣地区には、北石垣に塚原が、南石垣に大塚と塚田がある。ほかに、亀川には城ケ塚、東山区に塚畑が、内成区に前塚が、天間区には松塚が、内竈にツカノモト、さらに南立石には塚ノ尾の地名があって、古代における別府の盛況を偲ばせるに足る。

当地には、鶴・亀のほか、なお動物の地名が多いのが目につく、牛・馬などはもとより、すべて一覧表として左に書き出してみる。ついでに（　）内に、身体の部位

を記してみるとする。

別府　小鹿・見牛（けんぎゅう）、（耳取）

浜脇　芝尾・猿ケ久保・鳥越・亀ノ甲・魚町・尾ノ上、（井手ノ口・シリウゲ・ビハノ首・田ノ口）

亀川　亀ノ甲・瓜尾（瓜生）・亀ケ平・鳥井ノ元・尾上尾崎、（船頭町・川原口・湯尻・田ノ口）

鉄輪　鹿ノ首・竜ケ下・鬼山、（平ノ口）

内竈　北尾関・南尾関・宮尾・亀山・牛ケ谷・尾崎、（湯の尻）

南石垣　牛踏・牛頭・鹿爪石・千疋・千疋前・千疋浦・鶴見原（川原尻・片毛無・北ノ口・幸尻・横枕）

北石垣　牛ノ久保・馬飼・馬場・尾崎、（蜷尻・牛尻・娘田・道尻・目歯頭）

南立石　鬼ケ嶽・尾曲・馬場・尾ノ上・鳥ノ湯・丸尾・鳥越・塚ノ尾、（口ノ平・極手・井手ノ口）

鶴見　鶴見・トビ・鶴ノ台・馬場・犬馬場・尾ノ根・角田・猪畑・下馬松・鶴見原、（井尻・原口・古賀口・田口・目歯頭・夫婦石・野口）

東山　蛇石・狐石・尾窪・鶴原・猿ダヌキ・クラギ、（井手口・井手上・原口尻・井口）

野田　尾崎田・ウリヲ・羽室・シシクライ、（姫山）

内成　ヲサキ・ヲサコ、

南畑　狐坂・狐ケ岩、（井手・竹井手・ニナシリ・谷尻・田ノ口・妻ノ田・鼻・井手ノ口・出口）

天間

平道　尾長・尾鼻、（井手口・鍋ケ鼻・八郎鼻・中頭）

以上、さすがに、東山区や南畑区には、蛇・狐・猿・狸・クラギ（竜蛇神のこと）などの地名が見えて、山間部だなと感じさせられる。そのほか鶴見には、トビ（竜蛇神）や猪が、別府と鉄輪と南石垣とには、鹿が記されている。

山野と、畑（農作物）と、湧水と。それらが動物の行動に密接に関係していることがうかがわれる。

また、鳥の湯とか、鳥井の元とか、そのほか湯のつく地名が、いかにも湯の町別府を思わせる。

身体の部位の地名では、目歯頭（めはず）とか、片毛無とか、また原口尻など、珍奇な名称が目につく。目歯頭は、それが快（よ）くなる神様をまつる小祠ありと、藤内氏より教示を

うけた。片毛無は分らないままである。最近、大分・椎迫で「頭半分様」という小祠で案内板を読んだ。「大分君」をまつるかと言われる巨石墳の神社近くである。これは、南北朝時代に此処で戦死した武将をまつる祠であると記されていて、そうかと知った。分ってみれば肯けるのだが、名前だけ聞くとビックリする。

おわりに一言。鶴見の「トビ」とは、鳥の鳶（とび）のことではない。日本の古代史上にあって活躍する竜蛇神のことである。本来は、宗像大神の化身とされる神であり、多くの宛字が用いられている。古代の神名のほかに人名（女性に多い）にも見られる。竜蛇神は、世界史的に「霊蛇・化鳥」とされる。（W・Locher『The Serpent in Kwakiutr Religion』また『宇佐託宣集』霊五）

神武天皇の東征で、登美彦の「金の鵄」の故事などもあり、歴史時代には、琵琶湖東岸の犬上郡に富之尾明神あり、大蛇伝説で知られる。昼なお暗い林間であった。それと同工異曲の話が、直入群の赤岩に、源ノ為朝のこととして伝わる。緒方惟栄の話としても伝わっている。また大神ノ惟基にかかる祖母山の大蛇神婚譚として、南側と北側とに、「富之尾」と「飛尾」があり、下っては佐伯惟治を祀る富之尾神社が、佐伯から延岡にかけて数多く存している（拙著『卑弥呼』）。

これに対し、住吉大神の坐す地には、ナガ・ナガラ・ナガヲなどの地名がある（宛字は多い）。同名の社祠も多い。この大蛇神の呼称は、インドからの直輸入なのであろうか。古代海人族のひろい活動の跡が偲ばれる。

八幡神がヤアタの神であり（八田・八幡など、宛字が多い）。ヤアタロ（弥太郎？）の名を知らぬものはあるまい。『宇佐託宣集』には、鍛冶の翁として現れ、次いで八頭の竜蛇神となり、さらに金色の鷹と化したと記される。出雲の、ヤマタのオロチが連想される。

ほかにクラジ（クラギ・クラ）の蛇神もある。神武天皇の熊野上陸の故事にも見られるが、宇佐宮から南して大蔵山から由布院・別府境の倉木山あり、さらに祖母山に近く倉木・倉木山に至るのも印象的である。

いずれも、蛇と鉄（金属）の関係がつよく窺われる。

そういうことで、鶴見のトビ（内山の東北三〇度、春木川の源流に位する）の名称が、竜蛇神の謂であること

は、間違いなかろう。先年、内山渓谷でツチノコ騒動があったことは、まだ記憶に新しい。藤内氏から、別府ではコロコロ蛇というと教示をうけた。久住山ではトックリ蛇というとは家内の言である。

さて「内山」という地名は、宇佐八幡の南に御許山・雲ガ嶽・大蔵山という三山に囲まれた地である。紀伊の熊野大社にも内山の地がある。宮中では、大内山と言われている。県内では、三重町に内山の観音（炭焼小五郎のこと）が知られる。当地では、鶴見大権現の「内山」という意味の呼称ではなかろうか。大蛇神の隠棲するにふさわしいところである。タタラの地名も近くにあり、三重の内山と同じである。三重ではその奥に三重鉄山があり、近年まで白い標注が建っていた。また出雲では、鶴見の「火男火売神」とは逆に、「火女火男」であり、オカメ・ヒョットコの、ドジョウすくいとして有名であるが、これはじつは砂鉄だ、という説がある。

蛇と鉄の関係が、世界史的な問題であると同時に、案外の身近にも存在することを、思い知らされる。

四、金属文化

—むすびに代えて—

やっと本論に入るところまで辿りついた。だが、少し地名のことにこだわりすぎた。その地名の問題も、これからのことである。

本稿では、言葉と身体の関係に注目して体系づけてみたいと思った。人間の作り出した文化が、コトとモノとを媒介として、「地名」のうちに見出されるという意味での地名を考えていこうと思った。

中田薫博士の「法制史における手のはたらき」（『法制史論集』第三巻）に触発されて、身体の各部にわたって「活動を示す言葉」を、永年の間、書きぬいてきた。それを土台にして「地名」を考えていこうと思っていたが、別府の地名を分類していくうちに、思いがけず動物地名の多いこと、身体の部位で表現される地名も相当あることがはっきりしてきた。と同時に、分らないことも次ぎつぎと見出した。また動物と身体とにかかわっての技術・文化的地名に強く心ひかれるものがあった。

鶴見と石垣原の地名のうちで、問題としたい点を整理

してみよう。

動物地名のなかで、鶴見区の奥の「トビ」のことは、すでにふれた。それは大蛇神のことで、むしろ「タタラ」・「鍛冶」と関係がつよそうに思われる。

南石垣の「千疋」と「牛頭」は一緒に考えてみたい。地域をまとめて、左の四つにしてみる。

(1)鶴見　トビ・タタラ・井尻・年ノ神・荒屋敷・古屋敷（―大宮司・古殿―）

北石垣　鍛冶屋・梶田（カジ＝鍛冶カ）・井手・井手下・井尻（―大宮司・神宮司―）

南石垣　山ノ神・千疋・千疋前・千疋浦（浦は裏）・土穴・牛頭・年ノ神・古屋敷、

(2)天間　スナ畑・荒金・鉱地・登立・宮ノ本、

野田　タタラ（鉄輪の境）・ドウ山（銅山カ堂山）・金ピラ山・ヒジリ山、

内竈　釿（かんな）の掛（かんな）・釿の掛前・梶久（鍛冶給）・堂面（銅免カ）・金丸、

(3)鉄輪　風穴・タタラ・宇土山（うと＝洞）・水落シ・梶屋（＝鍛冶屋）・井手添・殿ヤシキ、

亀川　銅面（＝銅免）・ホキノ元（洞ノ元）、

(4)浜脇　タタラ・登り立・穴守・井手ノ口・金毘羅山・年ノ神・山ミコ（＝山の神の使）、

内成　梶原（カジ＝鍛冶）・トヲメン（銅免）、

(1)～(2)と、各地区をまとめて、四つを比べてみると、南石垣の「千疋」は、鍛冶の匂いがきわめて強くなる。タタラ・鍛冶の周辺の地名をヌキ書キしたが、合わせてセットとして考えてみることが出来はしないだろうか。

南方熊楠は、『千疋狼』のなかで、まず土佐の東岸の野根山（佐喜浜町）の話にふれ、これが鍛冶屋の母であるとされる（『熊楠文集』2）。そのほか各地の例として山陰の松江、米子から、中国大陸、さらにボルネオに及び、狼が猪になる。朝鮮半島の虎やぐらの話にも言及する。さらに遠く、アビシニアのことに及んで、「鍛冶よく狼、ヒエナ等の獣に化身するは、最も土佐に近い」と言われている。さらに那智山を侵略した怪賊一ツタタラの言い伝えなどにもふれる。「熊野権現は鋳物師（いもじ）明神」（『神道集』）として理解できよう。

柳田国男も「狼と鍛冶屋の姥」（『桃太郎の誕生』）

で「産ノ杉伝説」からいろいろと説いている。

また『山の人生』で土佐の「山ミコ」にふれている。

当地、石垣の「千疋」の地名は、右の「千疋狼」の下の語がとれて、千疋だけが残ったのではないだろうか。

すぐとなりに「山ノ神」の地名のあることも気にかかる。ふつうに「一ツ目の竜神」であったり、「一ツ目・一本足の大男」（大分市の九六位山）であったりする。さきの怪賊一ツタタラの名も同様であろう。貝塚茂樹『神々の誕生―中国史―』には、鍛冶神のことが詳しく説明されている。どうにも気にかかる。その折り、藤内氏から連絡あり、石垣の千疋と内竈とに、「金山彦」を祀る石祠がある、との教示である。これで決まった。

千疋の地名は、タタラと応じる鍛冶屋のことに相違ない。付図でみると、ずい分と大きい。これは古墳群の存在とも関連するほど、別府地方の中心的地位を占めるのかも知れない。もう少し調べる必要がありそうだ。

「土穴」の名も、他地区の「風穴」や「洞ノ元」また「登立」と相応じ、鍛冶地名である。

山ふところの「タタラ」の所在もふさわしい。そこから、鍛冶関係のものとして、カマド、カンナ（鉄穴）・カジ・銅免・井手（＝カンナ流しの工作物）などの地名も出そろい、山ノ神・山ミコや、屋敷の地名も揃っている。「千疋」が、鉄カジをあらわす、技術・文化の地名なることは疑いない。

その西の「牛頭」も、関係がある語だと思われる。

これは、牛頭天王（スサノヲ尊、鍛冶族の祖神）を祀る社祠（八坂社）があることからの地名であろう。

問題がつぎつぎと出てくるけども、地名をセットとして考えれば、地域の文化の実相を明らかにしてくれることが、分かったように思えてくる。

―　以上　―

別府市

大字別府
大字南石垣
大字浜脇
大字北石垣
大字南石垣
大字別府
鶴見原
野口原
上野口
境
中鳥
仮屋
朝見
見十
中原
南原
乙原
向原
耳取
吉藤山
城山
ナベ
河内
芝尾
石田
金鬼籠山
谷ノ裏
東町
東浜
泉町
西浜
向浜
松原
立田道下
竹田
田分田
南町上
南町下
北町上
北町下
新開地
新成町
中通
西町
上ノ町
中ノ町
新町
船場
年ノ神
神ノ木
上野
田渕
赤野
ソウス
鶴川
小道
辻
悠台
小山寺
宝満寺
岩谷
亀の甲
ウド
平田
山田前
山田井
陣場
浦田
矢ノ林
大小窟
鶴ノ台
津留山
太平
向原
威川
上サ
鍋
照湯
小倉
芙石
南野地
ヒゲ石
ツツラ
大石原
前田
タタラ
菜畑田
鶴見
宮園
ニツ蔵
多中原
竹ノ内
堤尻
今井
三月田
宮ノ前
山王
原口
御茶屋場
上ノ原
廻台寺
中野
竹ノ原
中河原
大宮司
古殿
夫婦石
岩国
古賀口
大畑
中原
瓦屋敷
門田
井尻
圓松
古屋敷
横土井
水ノ原
尾ノ根
原中
馬場
桑ノ元
年ノ神
宮添
角山
水車
新別府
石田
下原
五反
前畑
西法寺
大馬場
南原
著相寺山
上森山
角田
合ノ坪
大字官見
下田井
竹ノ畑
大野地
野口
早土堀
野地
下森山
市ノ原
天神畑
横打
下馬松
日隠頭
道尻
行部川
向田
尾崎
屋敷田
九月田
三月田
娘田
四月田
御塚
橋本
中野
一町田
北中尾
深町
馬場津
長田
五反分
杉ノ本
宮下
外園
若林
馬場
宮本
前林
主
寺
丸
敷
屋敷
黒田
井手手
蔵迫
蔵田
中八二
竹田
横枕
一夕
横田
高石原
畑峡
五反田
井尻
井田ノ下
桐木
定
下川
寺尻
神子西
溝貝
石田大塚
浜田
長田
小路
身
無
畦
枇杷田
横要
本
柳
久保田
中道寺
浦田
手走前
土六
手走
下走
横畑
横田
高中
南水
寺ノ上
寺ノ脇
宮ノ前
年ノ神
下田中
森田
沼賀
浜ヶ浜
南浜
小平田
反田
春田
星上
星敷
田原端
南原
牛
原
鳥
四反
二反
畑
平田
寄星敷
向田
南大木
牛路
川原尻
新開地
神開
鬼谷
北町下
北町上
太呂辺
南町上
南町下
立田道下
田分田
竹田
福田
伊勢
人江町
新町
船町
上ノ町
中ノ町
東町
東浜
泉町
西浜
松原
向浜
新成町
金鬼籠山
年ノ神
神ノ木
谷ノ裏
芝尾
石田
河内
矢ノ林
浦田
陣場
田嶋田井
山田前
山田
ウド
平田
亀の甲
宝満寺
岩谷
吉藤山
城山
ナベ
田ノ口
川久保
影ノ木
大小窟
松平
芝尾
笹川
小山寺
悠台
辻
小道
赤野
ソウス
鶴川
田渕
蓮
ヨ
ヲオシ
ヲコチ
ヲイツキ
船原
中茂
志高
鬼ヶ迫
温水
種の畑
蔵人
台
エゲ
坂ヶ平
引野
平畑ケ
下コガ
温川
花ツラ
御寺原
堀田
湯ノ本
ソコバタ
田屋
湯ノ向
地蔵ノ下
尼曲
梅手
井手ノ内
本村
尾ノ上
馬場
上高原
山田
雀ヶ本
北田島
自ノ迫
板地
鳥越
雀ノ上
南田島
下板地
板地中須賀
野原
内田
上ノ田
向原
カケ平
塚ノ尾
長畑ケ
観海寺
坂本
中津留道北
下向原
中間
船場
白土
山ノ神
松葉
三原端
丸尾
中津留
平
杜松
一ノ出
丸尾
大字南石垣
大字別府
鶴見原
芸葉寺
南原
中原
仮屋
上野口
境
太本畑
森本
路
丸
向田
寄星敷
牛路
川原尻
新開地
神開
鬼谷
北町上
北町下
太呂辺
南町上
南町下
立田道下
田分田
竹田
福田
伊勢
人江町
新町
船町
上ノ町
中ノ町
東町
東浜
泉町
西浜
松原
向浜
新成町
大字浜脇
大字別府
大字南石垣
大字北石垣
大字南石垣
大字別府
コヒロイ
マツボリ

市小字図

別府市

転載・転用を禁ず